

シリーズ 中学校武道

授業の充実に向けて

136

つまずきをどう克服したか²⁹ (障がいがある生徒と共習する相撲授業)

山梨県富士吉田市立下吉田中学校

障がいがある生徒への武道の指導はどうあるべきか――。中学校で武道の授業が必修となって8年。安全で楽しく、効果の上がる授業の実現に向けた取組が全国の学校現場で続いている。そんな中、2014年度から相撲授業を導入している富士吉田市立下吉田中学校では、3年前から下半身に障がいがある肢体不自由の生徒に対する相撲授業を行っている。実践の鍵は「健常の生徒との共習」という。

試行錯誤しながら新たな学びの形を模索する同校の相撲授業を本誌記者が取材した。



富士山（右奥）を望む下吉田中学校で行われた中学校武道授業（相撲）指導法研究事業（2016年10月）

1 下吉田中の相撲授業

富士山の豊かな自然のもとで生徒を育む富士吉田市立下吉田中学校では、2014年に赴任した保健体育科の広瀬理奈教諭が中心となって相撲授業を行っている。同校の相撲授業は外部からも高い評価を受けて、16年10月には同校で日本武道館と日本相撲連盟主催の中学校武道授業（相撲）指導法研究事業が実施された。

2 生徒の戸惑いと相撲授業の提案

17年、肢体不自由の女子生徒2名が、下吉田中学校に入学し、特別支援学級に在籍しながら保健体育の授業を交流学級で受けることになった。肢体不自由者の入学は下吉田中学校では初めてのことであり、他の生徒たちはどう接していいかわからず、まるで別世界の人たちのように接していた。

2人は、小学校では6年生まで特別支援学級のみで授業を受けていたため、同じ小学校出身の生徒でも2人との関係は希薄であった。

「他の子が怪我をして松葉杖を使っていたら、生徒は助けてくれるのに、2人は誰にも助けてもらえない」。下吉田中学校で2人の学校生活を支援するコーディネーターの矢野広美教諭はこのことに違和感を覚え、1学年の教員間でも大きな問題となっていた。矢野教諭はそのことを広瀬教諭に相談。

3 相撲だからできる

一つ一つを理解・消化しながら広瀬教諭はこう切り出した。「相撲を突破口にしよう!」。

それは相撲授業を他の生徒とともに実施して、2人の取り組み方、そして他の生徒の姿勢も変えさせようという斬新なアイデアであった。矢野教諭は目を丸くしながら「相撲なんて無理でしょう」と返答。確かに一つのことを一緒にやれば分かり合えるという考えは理解できる。しかし、相撲ではサポートが必要になるし、2人のうち1人は下半身の機能を補う器具を着用している。土俵の上で激しくぶつかり合いながら攻防を展開する相撲には到底無理がある。しかし、広瀬教諭はにっこり笑いながらこう切り返した。「相撲だからできるのよ」。

広瀬教諭は、バスケットボールが専門だが、相撲の魅力に惹かれて前任校などで相撲授業を実施。

4 周りの戸惑いを払拭、分かり合える共同作用

こうして、17年から1学年で、肢体不自由の生徒を含めた相撲授業が開始された。

単元計画は、今まで広瀬教諭が構築してきた指導法を踏襲して作成。「押し」を中心とした段階的な授業であった。その中で2人ができること、できないことを検討していった。その結果、授業の味は概ね他の生徒と同様のものとなっていた。指導体制は、広瀬教諭が授業者となり、市教委から肢体不自由の生徒の支援員として湯山江美さんが派遣され、コーディネーターの矢野教諭も補佐役にまわった。

当初、授業では他の女子生徒は2人を押し倒すことに戸惑い、2人との距離を測りかねていた。「なんで上手いかわからないだろう」。湯山さんは泣きそうなくらい辛いこともあったという。同様に市教委の支援員である中村郷子さ